

# 武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を  
楽しみながら学ぶ



吉祥寺秋まつり・神輿連合渡御の実況中継

コミュニティ放送局とは、送信出力最大20Wとして、地域に密着した情報を提供するために平成4（1992）年に制度化されたFM放送局です。その第1号は、美しい夜景で有名な函館山ロープウェイ株式会社が運営する



## 市民の暮らしと共に「むさしのFM」開局25周年

流れてくるラジオの音に耳を澄ませる。耳からの情報は、時に昔の記憶を呼び覚ましてくれる、そんな経験はないでしょうか。コミュニティ放送局として東京で初めて開局したむさしのFM。武蔵野市民の暮らしに寄り添う放送局の25年を振り返ります。

「FMいるか」。ロープウェイの山麓駅に放送スタジオがあります。その後、平成7年の阪神・淡路大震災を機に、災害時におけるきめ細やかな情報伝達ツールとしての役割が注目されて開局が増え、令和元（2019）年12月では、全国332局のコミュニティ放送局が電波に乗せて、ローカル色豊かな情報を流しています。

### 市民の安全・安心を ラジオ放送として支えていく

「むさしのFM」の開局は平成7（1995）年3月。都内初、全国では15番目のコミュニティ放送局として、武蔵野市、武蔵野商工会議所など、当時の36法人が出資する第三セクターによってスタートしました。

阪神・淡路大震災の発生から2カ月

というタイミングもあって、開局間もない9月には、武蔵野市と「災害時における緊急放送に関する協定書」を締結。市と連携して、震度5相当以上の地震発生時には防災無線と同じ内容の放送が自動的に流れるシステムを導入するなど、安全・安心なまちづくりに貢献する放送局として一歩を踏み出しました。平成20（2008）年には武蔵野市役所防災安全センターに緊急放送室も開設。そして、コミュニティ放送局として市民の安全・安心を支えていくという在り方は、平成23（2011）年、大きな力を発揮することになります。

その年の3月11日午後2時46分、東日本大震災が発生。当時のことを、放送係長の久保田浩友さんは次のように振り返ります。

「震災直後、まずは社員がスタジオ



久保田浩友係長

がある武蔵野商工会館から吉祥寺駅に向かいました。番組を生放送に切り替えて、現場の状況を伝えるためです。鉄道の状況、駅や駅前商店街、人々の様子を電話で実況中継しました」

その後も、市から発表される被害情報や交通機関の運行状況を逐一放送。当時錯綜していた計画停電についても、市の対策本部が発表する情報を緊急放送室から即座に放送し、どのメディアよりも早く市民に情報を伝えるなど、災害時の地域メディアとしての役割を担いました。

むさしのFM 78.2MHz

## 都市性に考慮した 市民参加による番組づくり

さて開局当初、むさしのFMでは市民ボランティアを公募し、制作スタッフとして起用していた時期がありました。その後、解散したボランティア組織が、「むさしのFM市民の会」(以下・市民の会)として復活したのは平成9(1997)年のこと。以来、今年6月に通算6000回を突破した長寿番組『むさしのPoddy』の制作に携わり、月々金曜日の毎朝、市民の会のメンバーが電話で生出演し、地域の話題、季節の情報、趣味の話などをリスナーに届けています。

また平成13(2001)年にスタートした『発信! わがまち・武蔵野人』も市民の会が企画コーディネートする番組です。作家や音楽家、俳優、実業家など著名人が多く暮らす武蔵野市の特色を生かし、市民の会が人選したゲストを局のアナウンサーがインタビューするという20分の番組です。こちらも6月には通算950回目の放送を終えました。

市民の目線、視点が入った番組づくりはコミュニティ放送局ならではのものです。地元愛にあふれた放送はリスナー



『武蔵野人』収録時の様子(市民の会と出演者)

たちに伝播し、さらなる地元愛を膨らませていくのではないのでしょうか。

「地元の人なら説明抜きでもわかるテーマや音楽を『さりげなく』混ぜることで、武蔵野・吉祥寺発信の放送であることを感じてもらえればと思います。リスナーの文化教養レベルが高いまち。それに応える内容、言葉選び、選曲にも気を使っています」と、久保田さんは番組づくりへの思いの一端を明かします。

これから迎える

新しい時代において

ラジオの可能性は無限大

災害時の緊急放送、地域の話題提供だけでなく、むさしのFMが求められる

る役割も多様になってきています。その可能性を示唆するのが、昨年4月に始まった『子どもおやすみラジオ』。子育て世帯を想定した子ども向け番組で、これまで行ってきたラジオ番組とは少し趣を異にしています。

「物語の朗読を流して、子どもを寝かせる時に聴いてもらおうという企画でしたが、放送が始まって2週間たった頃から、『遅くまで起きていた子どもが寝るようになった』『続けてほしい』といった大きな反響があり驚きました。今年4月からは、音源を他局制作のものから自社制作に切り替え、へゆっくり、じゅっくり、丁寧」を指した読み聞かせを放送しています」と、エフエムむさしの代表取締役社長の小島祐一さん。寄せられる感想には『子どもの頃に戻ったよう』『私のような高齢者にとってもおやすみラジオです』といった内容のものも多く、放送を楽しむに待っているのは子どもだけ



小島祐一代表取締役社長

ではないそうです。

高齢化社会のいま、「例えば高齢者の方の転倒防止、認知症抑制のトレーニング番組など、映像のないラジオだからこそできることがあると確信しています」と小島さんは語ります。

最近ではラジオも電波だけではなく、スマホ、パソコン、AIスピーカーなどインターネットを通じて放送を聴くことができますが、2020年、新型コロナウイルス感染症により私たちの生活は大きく変わり、在宅で仕事をする人が増えた結果、むさしのFMへの3月中のアクセス数は2万6311だったのが、4月には5万7513、5月には16万1103と爆発的な伸びとなっています。ラジオを聴きながら仕事をしたりリスナーの増加は、「こうした生活様式の変化に向けてラジオは何ができるのか、うれしい課題を与えてくれた」と小島さんは言います。

仕事をしながら、あるいは何かを見ながらテレビやYouTubeなどの映像を見ることができませんが、ラジオではできます。さあ、ラジオのスイッチを入れて、電波をむさしのFMの周波数78・2メガヘルツに合わせてみましょう。受信状況が良くないときはスマホやパソコンからお聴きください。